

ホームセンターにある園芸コーナーをふと覗いてみたことがきっかけで、現在、自宅で多肉植物の苗が増殖中である。多肉植物にもいろいろあるが、その魅力はなんといっても見た目にある。ブロック状に幾何学的なパターンを成すもの、バラの花に似た美しい株形を成すもの、葉の表面が透けて宝石のように光を反射するものなど本当に多彩である。また、形だけでなくその生態にも特徴がある。水遣りを忘れて放っておいても生き続けるし、葉を握いで土に置いておくと勝手に発根して再生してくる逞しさがある。「何でこのような植物が生まれたのか」という

競争で圧倒できるように感じるが、植物学者に言わせると、そうではないらしい。多肉植物の生存戦略はあくまでも一つのニッチ戦略に過ぎないのだという。

植物が育つ普通環境では、より高く背丈を伸ばし、より広く葉を広げた植物がより多くの太陽光を獲得できるので、「成長スピード」や「規模」が競争の決め手となる。これに対して、多肉植物は成長に使うべき養分も葉に蓄え、普通よりも時間がかかる2段階方式の光合成を行い、高さを追求する上では無駄とも言える程に生長点を多く持つ。多肉植物が発達させた能力は普通環境に

数 | 理 | の | 窓

過酷な環境でも生存できる植物は強いと言えるか



のが、多肉植物を見て自然と生じる感覚である。

多くの多肉植物の原産地は南米や南アフリカなどの乾燥地帯であり、その特徴の多くは過酷な環境に耐えるための生存戦略の結果なのだという。例えば、ぷっくりとした葉には乾燥時に備えて水分や養分が貯蔵されている。また、多肉植物の光合成は、そのプロセスの途中で外部に水分が蒸散してしまうリスクを避けるために、プロセスを昼夜で分割した2段階方式になっている。更に、乾燥地帯ではタネを運んでくれる虫や鳥の数が少ないため、体全体に生長点を持ち、落ちた葉や折れた茎からでも発芽する能力を備えている。

このように、乾燥した過酷な環境でも生きられる能力を備えているのであれば、多肉植物は他の植物との生存

においては、むしろ競争の足枷になってしまうのである。

この「成長」と「ストレスへの備え」のトレードオフに対して、多くの植物はどちらか二者択一ではなく、両者を独自にバランスさせている。そのバランスを自らが生きる環境に最適化できた植物こそが、そのニッチを勝ち抜くことができるのである。ビジネスの世界においても、特に最近は環境変化が激しく、企業経営にとってストレスへの備えが重要になっていると言われるが、その一方で、事業成長に対する株主からの厳しい目もある。成長とストレスへの備えをどうバランスさせるかは、今日の企業にとって悩ましい問題ではあるが、それは同時に自らの生き抜く場所を再定義する問題として捉えることができる、ということだろう。 (小粥 泰樹)